



イギリスのシティズンシップ教育

〈第1回〉

西武文理大学教授
新井 浅浩



プロフィール

あらい あさひろ

昭和35年生まれ。横浜国立大学教育学部卒、カリフォルニア大学教育学大学院修士課程卒。現在は西武文理大学サービス経営学部教授。専門は比較教育学、人格・情意教育論。

主著に『現代英国の宗教教育と人格教育（PSE）』（共編著、東信堂）、『市民性形成論』（共著、放送大学大学院テキスト）など。

近年、わが国において市民性形成のための教育について議論されていますが、その際、イギリスではそれが必修化されていることが、しばしば伝えられています。

またわが国でも、ごく一部で先駆的に実践されるようになりましたが、そのあり様は少なからずイギリスの影響を受けているようです。

これから六回にわたって、イギリスのシティズンシップ教育について紹介していきますが、初回である今回は、いかなるきっかけや経緯の中でそれが必修化されることになったのかを説明したいと思います。

シティズンシップ概念の再考

近代におけるシティズンシップとは、一七世紀から一八世紀にかけての市民革命をきっかけとして、国民国家における義務と権利をめぐる議論としてとりあげられてきたものですが、それは、「自由」と「平等」の保障を目指す民主主義の発展を背景としています。そしてその民主主義とは、自由主義の伝統と共和主義の伝統の上に成り立っているといえるのです。このようなシティズンシップの

あり方は、イギリスの一九七〇年代および八〇年代以降の政治的・社会的状況の変化により、問い直されることになったのです。

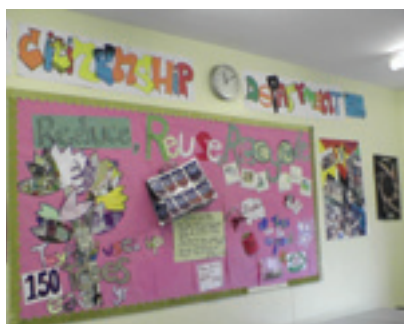
一つは福祉国家の見直しです。イギリスの福祉政策は、「ゆりかごから墓場まで」と称されるように先進国のモデルとされてきました。第二次大戦後政権をとったアトリー労働党政権は、公営住宅の建設や鉄道の国有化、年金や雇用に関する社会保険など福祉サービスの推進、国民保健サービス（NHS）による医療の無料化などを導入しましたが、それは、その後、政権をとった保守党にも受け継がれたのでした。このようにイギリスにおいては、二大政党が足並みをそろえたという意味で「コンセンサス政治」といわれたのです。

しかし、一九七〇年代以降、その手厚い福祉政策が財政を圧迫し、また人々の勤労意欲の低下を招いたと指摘されました。一九七九年に、サッチャー保守党が政権をとり、それまで長く続いたイギリスの経済的不振を打破するため、福祉政策を見直して市場原理を導入しました。

福祉国家におけるシティズンシップは、個人が国家と契約をすることにより、その権利と義務が生ずるという考え方でしたが、ここにおいてそれは大きく変容することになったのです。

またそれまでのシティズンシップは、国民国家というものが前提となっていたのですが、それが揺らぎ始めました。移民による文化的多様性の高まりや、イギリス内でのウェールズ、スコットランド、北アイルランドの自治の問題、さらには欧州統合の動きなどは、単一の国家としてのシティズンシップの考え方の限界を示したものでした。

さらに経済のグローバル化や科学技術・通信技術などが進歩したこと世界の人権や地球資源の問題を意識せざるをえなくなりました。



ロンドン市内の中等学校のシティズンシップの教室の掲示物—
（ゴミ）削減、再利用、リサイクルが標語として掲げられている。

たが、このこともシティズンシップの概念を再考することにつながりました。

新たな シティズンシップ教育の始まり

一九九七年にトニー・ブレア率いる労働党が政権を奪取しましたが、その政策は、旧来の福祉国家への回帰ではなく、またそれまでのいわゆる新自由主義の路線でもない「第三の道」と称されるもので、教育政策もその枠組みの中で実行されることになりました。

加えて一九九〇年代から二世紀初頭にかけての社会的な問題状況は、これまで以上にシティズンシップ教育の必要性を認識させることになりました。

その一つは、民主主義の危機と捉えられるいくつか事態です。若者たちが政治に対して無関心であることが指摘されていて、それは特に若者の選挙の投票率の低さに表れています。またそれは、二〇〇一年九月十一日にアメリカで起こった同時多発テロをきっかけとして浮かび上がった問題でもあります。ブレア首相は、これを「民主主義の価値に対する拒否」とい

う捉え方をしました。これによりイギリスにおいては、イスラムの過激派を取り締まるための「二〇〇一年反テロリズム、犯罪および安全保障法」「二〇〇五年テロリズム防止法」などが制定されました。これはそれ以前から存在していた構造的な人種差別と関連して、民主主義を脅かす事態がせまったとも認識されています。

また先進国に共通しているといわれている怠学、破壊活動、無差別暴力、計画的犯罪、薬物利用の習慣など「若者の疎外」の問題は、イギリスにおいても例外ではありませんでした。加えてイギリスでは若年の失業率の高さが一九九〇年代後半から特に深刻な状況ですが、このことにより若者への自立支援が重要なテーマとなりました。さらにブレア政権下においては地方分権化が進み、スコットランドとウェールズでは一九九九年に最初の地方議会選挙が行われ、自治政府が誕生したのでした。こうして国家と自治政府との双方でのシティズンシップを考察する必要に迫られたのです。

このような状況の中で、政府に

においてもシティズンシップ教育のあり方が検討され、一九九七年には通称『クリック報告書』が出されました。結果として二〇〇二年からシティズンシップ教育が義務化となりましたが、そこでは同報告書で提示されたものが基本的に踏襲されました。同報告書の座長であった政治学者のバーナード・クリックは、民主主義についての啓蒙書を書いています。そこで注目すべきは、民主主義というものをひたすら賞賛するべき至上の価値として捉えているのではないという点です。それは、ある意味では永遠に解決されない問題といえるのです。ここにおいてシティズンシップとは、民主主義そのものの抱える問題に対して、自ら能動的に取り組んでいく市民の資質と能力を想定しています。したがってその教育は、そのための市民的能力の育成を眼目としているのです。

シティズンシップ教育は、義務教育修了である一六歳までの段階での中等学校において必修化されました。初等学校においては「人格・社会性の育成と健康のための教育」(PSHEといえます)と

の融合によるものとして必修に準ずるとされました。

今般のシティズンシップ教育の内容の主要な要素の一つは、政治的リテラシーの教育です。これは、クリックがかつて政治教育の導入を熱心に唱えた人物であったことが反映されているともいえますが、その一方で、主要な要素の中に「社会的道徳的責任」を入れていくことにも注目しておきたいのです。このことは、先ほど指摘したように、「若者の荒れ」が深刻に意識されていることの表れともいえるでしょう。総じていうならば、イギリスのシティズンシップ教育は、若者を立派な大人にするための総合的な取り組みといってもよいでしょう。

次回からは、シティズンシップ教育の具体的な実践の例を紹介していきますと思います。



政府発行のシティズンシップ教育における評価のためのハンドブックに示された単元「民主主義の実践」の挿絵から



イギリスの シティズンシップ教育

第2回

西武文理大学教授
新井 浅浩

●プロフィール あらい あさひろ

昭和35年生まれ。横浜国立大学教育学部卒、カリフォルニア大学教育学大学院修士課程卒。現在は西武文理大学サービス経営学部教授。専門は比較教育学、人格・情意教育論。

初等学校のシティズンシップ教育

今回は、初等学校におけるシティズンシップ教育の授業について紹介します。

前回お話ししましたように、初等学校でのシティズンシップの授業は、PSHE(子どもたちの人格や社会性の発達そして健康的な生活を目指すための教育プログラム)と連動したかたちで行われます。

シティズンシップとPSHEの授業によって目指されるのは、次の四つについての知識・スキル・理解を子どもたちが獲得することにあります。

- ・ 自信と責任感を育て、自分の能力を最大限に発揮すること。
- ・ 能動的な市民としての役割を果たすための準備をすること。
- ・ 健康的でより安全なライフスタイルをつくり上げること。
- ・ 他者との違いを尊重すること。

これらを目指して、各教科の中で横断的に取り組んだり、そのための特設の時間を毎週一回設けたり、学校行事などを開催したりします。特設の時間(わが国でいえば、道徳の時間のようなもの)

よう)では、「ルール」「選択」「感情」などをテーマとしてすめられています。

サークルタイム

ここで初等学校における授業で典型的に行われる「サークルタイム」という実践についてとりあげてみましょう。サークルタイムとは、学級の中で肯定的な関係づくりや道徳的発達、自己肯定の育成などを目指した活動であり、輪になって実施することから、このような名前で呼ばれています。一種の集団ゲームといってよいでしょう。サークルタイムは、PSHEやシティズンシップの授業だけでなく、へ話すことやへ聴くことの学習ともいえるので、英語の授業の一環として行われることもあります。

それでは、私が実際に見学したロンドン郊外の初等学校二年生(わが国でいえば小学校三年生)の授業の例を紹介します。

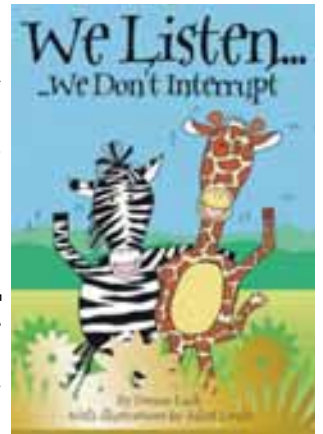
まず、教室の一角に輪になってすわります。ウォーミングアップとして「フルーツ・サラダ」という簡単なゲームをします。全員が「キウイ」「バナナ」「リンゴ」「梨

の四つに分けられ、先生が選んだ果物に指定されている子どもだけが、そのつど席を移動するのです。わが国ではフルーツ・バスケットと呼ばれるもので、一種の椅子取りゲームです。子どもたちは、とても楽しそうに取り組んでいます。サークルタイムにおいて、このウォーミングアップはとても重要であるとされています。

次にサークルタイムのルールを全員で確認します。それはいくつかありますが、ここでは「他の人の発言をよく聴くこと」「デヴィ・ベアのぬいぐるみを持つているときに話すこと」「話している人の顔を見ること」「人が話している時には静かにすること」「他の人に対してふざけたことを言わないこと」が確認されていました。その後、先生が課題を出して、それに対して一人ずつ順番に答え



サークルタイムの授業風景
サリー県のパーフォード国教会
初等学校にて



サークルタイム用のポスター「私たちはきちんと聴きます。私たちは邪魔をしません。」(ジェニー・モスレイのホームページより)

ていきますが、その時にも若干の工夫があります。まず発言するとき、デディ・ベアのぬいぐるみを受け取ってから発言しますが、発言したくない場合は、パスをする権利があります。これも重要です。しかもパスした子どもは、自分が望めば最後に発言するチャンスが与えられます。

最初の課題は、「今週、楽しんだことは何ですか?」というものでした。今週一週間の中で、楽しんでできた学習活動について、それぞれの子どもが一言ずつ発言していきましました。

次は、先生がデディ・ベアのぬいぐるみを抱えて、「デディは今とてもイライラしています。それは何故でしょうか?」と質問を投げかけました。子どもたちは、テ

ディ・ベアの抱える悩みを当てようとしします。子どもたちの発言の一つが正解とされました。その悩みは算数の問題がうまく解けないというものでしたが、それに対して子どもたちは、どうすればそれを解決できるか助言しました。

最後の課題は、「今日または今週」私は〜ができるようになった」というフレーズを、順番に言っていくものです。

例えば、「私は物語をうまく読めるようになった」「私は筆記がうまくなった」など様々でした。この時、先生は一人ひとりの発言に対しては、良いとか悪いとかの評価をしません。この授業を観察したのは金曜日だったのですが、授業をされたグリーン先生から、今週は算数の勉強をはじめかなり負担の多い学習をしたのでこのような課題にしたこと、週の最後にこのような質問をすることに意味



自分たちが、子どもたちがよくできたと思ふステッカー(ジェニー・モスレイのホームページより)

があること、などの説明を受けました。

質問に対して全員がひと通り答え終わる度に、当番に当たっている子ども二人が、よい発言だと思った人、あるいは人の発言をよく聴いていた人を選んで、ステッカーをその子どもの胸に貼ってあげます。このときにも単に自分の友だちを選ぶということではなく、きちんと全員を評価した上で選ぶというルールが決められています。

サークルタイムでは、様々なテーマについて取り扱いますが、いずれの活動も、他者の発言をよく聴いて、その上で一人ひとりが自分の考えを発言する能力の育成を目指しています。そのために、ゲームによる楽しい雰囲気と定められたルールによって、自分に対して自信が持てるようにすることや、発言しやすい雰囲気をつくること、相手を尊重することなどを保障しています。

求められる自分の意見を表明する能力の育成

ところで昨年わが国において、タウンミーティングにおける「やらせ質問」が発覚し、新聞紙上を

にぎわせました。そのことをめぐっては様々な問題があると思いますが、私が疑問に思ったのは、そうした場面において積極的に自分の意見を表明することができ人間を、これまでわが国ではきちんと育成してきたのだろうかということです。

イギリスの学校の実践を見ていてわかることは、社会において堂々と意見を表明することができるようになるために、時間をかけた地道な取り組みをしているということです。実際、このサークルタイムの授業では、子どもたちみんなが、最初からうまく自分の意見を表明できていくわけではありません。注意深い雰囲気づくりやルールなどを設定し、少しずつじっくりと練習していく中で、自分に対して肯定的な捉え方をし、自分の意見を言うことができるようになっていくことを目指しています。

シティズンシップ教育においては自分の意見をきちんと表明するという能力をとても重視していますが、こうした実践から、その土台となるスキルを時間をかけて育成している様子がよくわかります。



イギリスの シティズンシップ教育

第3回

学校ぐるみで市民を育てる

西武文理大学教授
新井 浅浩

●プロフィール あらい あさひろ

昭和35年生まれ。横浜国立大学教育学部卒、カリフォルニア大学教育学大学院修士課程卒。現在は西武文理大学サービス経営学部教授。専門は比較教育学、人格・情意教育論。

前回に続き、初等学校でのシティズンシップ教育の実践について紹介します。

イギリスのシティズンシップ教育の重要な考え方に、特定の教科だけで教えるのではなく、学校のあり方や行動様式（エトス）、文化などを学校ぐるみで教えていくことがあります。例えば、民主主義はシティズンシップ教育が担う重要なテーマですが、その民主主義を非民主的な形で教えるくらいならば、何も教えないほうがまだましであると考えられるのです。

本稿では、シティズンシップ教育を啓蒙普及している『市民性財団』が発行した教師用ハンドブックから、学校ぐるみでシティズンシップ教育をすすめている実践事例を紹介したいと思います。

イングランド南東部ハートフォードシャーにあるロックハム初等学校は、二〇〇六年に受けた視学官による学校監査（これはすべての学校が義務づけられています）の報告書で「きわめて素晴らしい学校」と絶賛されています。

学校のホームページの冒頭で校長先生は次のように述べています。



ロックハム初等学校
（同校のホームページから）

「私たちの学校は、**“聴く学校”**です。私たちは、誰もが価値があると認められ、誰もが意見を表明できることが何よりも大切だという姿勢をとっています。」

ここにこの学校の方針のすべてが表現されているのです。

ロックハム初等学校では、児童たちも、学校における意思決定において、実質的な役割を果たしています。

意思決定の場

サークルミーティング

その一例はサークルミーティングです。この学校では、毎日一時一五分から一五五分間、集会を開いています。そのうち火曜日がこのサークルミーティングになっています。

サークルミーティングは、六年生が混合で、小グループになって

様々な問題について話し合う場です。そもそもイギリスの初等学校は一般的に小規模であり、この学校も児童数は、二四〇人前後です。それでも全校で話し合うのは無理なので、六つの小グループに分け、それぞれのグループで六年生がまとめ役を務めます。先生が一人ずつ付きますが、助言・指導役です。

毎回一五分ですので、一回で話し合いを完結させるということではなく、続きは次回に持ち越されます。話し合いの進め方は、前回本欄で紹介したサークルタイムの手法を取り入れています。最初に必ずウォームアップゲームを行います。これはサークルタイム同様、一人ずつ決められた形式で、自分について一言ずつ話していくのです。また、最後は、終わりのゲームとして、ウインクゲーム、おかしな顔を伝えていくなど動作のゲームをします。

議題は六年生が準備しますが、毎回いくつか出されます。例えば、ある日のミーティングでは三つの議題がありました。一つは、スピーキングと暗算能力を向上させるための良い方法について話し合うこと



ロククハム初等学校の
スクール・ロゴ
モットーは「一緒にや
ろう、志を高く持とう」

でした。ちなみに、この時は多くのグループでスプリングコンテストを開催するという提案が出たようで、それを開催することが決定したと翌週のサークルミーティングで報告されました。

次の議題は、リサイクルに関してもです。各教室にリサイクル用のゴミ箱が用意されたこと、それには色のついた紙は入れないように注意することが伝えられました。次に各クラスでこの箱を他のゴミ箱と間違えて使用しないことを監督する方法について話し合いました。また、毎日リサイクルのゴミ箱から校庭にある車輪つきの大型のゴミ箱に捨てに行く担当を誰にするのかを話し合いました。

最後の議題は、「どうぞ」「ありがとう」という礼儀の言葉を使うことを全員が忘れないで欲しいと、ある児童（名前も明らかにされました）からのお願いが伝えられました。ドアを開けて出入りする

時を観察していてそのことに気づいたと報告されました。

そしてそれらの議題の後には、何か他に問題にしたいことがあるか必ず確認されます。

議題のその他の例としては、いじめの問題、学校マガジンの名前、学校放送のスピーカーの設置場所、親たちが自動車で学校に来なくてすむようにするために自転車置き場を設置すること、などがありました。

児童会、生徒会など、児童・生徒による学校全体の会議の場は、わが国でも実践されていますが、それらは児童代表や生徒代表による場です。シティズンシップ教育においては、代表養成も重要なテーマですが、ここでは全員が発言に参画できるような機会を持つことを重視しています。同時に最上級生は、それぞれのグループで会議のまとめ役を務めますが、なるべく多くの児童がその機会を持つような工夫をしています。

教科の学習でも選択権を 与えられ、意思を表明すること

意思決定への参画は、教科の学

習やその他の様々な場面において選択権が与えられているところに見ることができま

す。例えば、毎週金曜日の午後に設定されている「ロククハム時間」は、全学年混合で活動する時間ですが、その内容は、四週間ごとに、先ほどのサークルミーティングで児童が決めるのです。活動の内容は、個別学習、スポーツ、建築、美術です。

また、昼休み等に校庭で遊ぶ時には、多くの初等学校ではプレイリーダーと称する大人たちが見守りますが、ここでは最上学年の六年生がその役を務め、どのようなゲームをするのかを決定し、また自由に遊ぶことを保障しています。

そうした選択権は、個々の学習活動の中でも与えられていると児童たちは認識しています。例えば、自分の学習に関する自己評価ブックや「思考様式の帽子」です。

自己評価ブックは、例えば個々の学習が終わった時にその理解度について「笑顔」「悲しい顔」のマークをつけるなど、児童がそれぞれの学習活動について自己評価し記入していくものです。児童による

思考様式を表す六つの色の帽子が教室に掲示されている。（同校のホームページから）



自己評価は、学年修了時に親に渡す成績報告書にも含められます。

思考様式の帽子は、わが国でもビジネスの世界で紹介されているエドワード・デ・ボノ博士考案の「並行思考」という考え方に基づくものです。「客観」「情意」「消極」「積極」「創造」「制御」という六つの思考様式を、それぞれ六つの色の帽子で表しています。紙幅の関係で詳しい説明は割愛しますが、児童は学習活動における発言の際に、それぞれの色の帽子をかぶり、その思考様式に従って発言することで、発言内容を選択することができるのです。

ロククハム初等学校では、児童が様々な形の選択権と、それにより自分たちの意思を表明する機会が与えられているのです。これらはまさに参加的市民の育成を目指した学校ぐるみのシティズンシップ教育といえるでしょう。



自分にできることは 何かを考え実行する

西武文理大学教授
新井 浅浩

●プロフィール あらい あさひろ

昭和35年生まれ。横浜国立大学教育学部卒、カリフォルニア大学教育学大学院修士課程卒。現在は西武文理大学サービス経営学部教授。専門は比較教育学、人格・情意教育論。

今回は、中等学校（わが国でいう中学・高校）の取り組みについて紹介します。本連載の第一回でもご紹介したように、イギリスの中等学校では、二〇〇二年よりシティズンシップ教育が必修となっています。

能動的な市民を育てる

イギリスのシティズンシップ教育の眼目は、一言でいうと「能動的な市民を育てること」と表すことができます。そうしたことから、自分たちの住むこの社会を自分たちでよくしていこうと考え、かつ行動する市民を育てることになり、その結果、投票行動にも結びつくと考えられます。能動的な市民を育てるため、その教育方法は活動的な学習が中心となります。すなわち、ただ単に教科書を通して知識を学ぶのではなく、生徒たちが、様々な活動しながら学んでいくというスタイルが中心となっているのです。

思いやりのある国民プロジェクト

イギリスで市民性教育の啓蒙普及を行っている市民性財団は、「思いやりのある国民」プロジェクトという中等学校を対象とした

事業を展開しています。これは、学校がシティズンシップ教育の一環として何らかの慈善事業に取り組むことに対し、活動資金や授業プランの提供など様々なかたちで援助するものです。

授業プランは全体を五週間のプログラムと想定し、その間の進め方は、次のようになります。

初回の授業で、各クラスは取り組み問題を話し合いで決めます。決定後その問題についての詳しい状況を、クラス内の担当グループが調査をします。次に、その取り組みについて周囲の人にも協力を呼びかける方法を決めます。そして行動計画を作成し、全員で実行します。最後に、取り組みについての評価をします。他のクラスも、それぞれが別の取り組みをすすめます。

取り組む活動は、そのクラスの生徒だけに限るのではなく、他のクラスへも呼びかけることもできます。そして、全部の取り組みが終了したら、一番よかったクラスが選出されます。各クラスは、取り組みに際しての資金として市民性財団から五〇ポンドの補助を受

けることができます。

この授業プランは、あくまでも基本であり、実際には各学校の事情に応じた形で実践されることはいうまでもありません。

慈善事業としては、社会的企業、募金活動、募金のための広報、ボランティア活動、「政治的な」キャンペーン、「住民としての」キャンペーンがあげられています。

イギリスには、ナショナル・トラストやセイブ・ザ・チルドレンなど様々な慈善団体がおり、それらを有効に活用することも推奨されています。

トリー・アカデミーの実践

ここでは、二〇〇六年度の優秀校として市民性財団から表彰されたトリー・アカデミーの実践について見てみましょう。

トリー・アカデミーは、スコットランドのアバーディーン市にある全校生徒五〇〇名弱の小さな中等学校です。トリー・アカデミーでは、実に多くの慈善活動を行なっていて、二〇〇五年から二〇〇六年にかけても、大小五〇以上の活動をしています。

その一つとして、生徒たちは、

首相、国会議員、地方議会に、自分たちが関心を持った福祉、環境、地域の問題についての意見や要望の手紙をそれぞれが書く、という活動をしています。

例えば、世界の子どもたちを援助するNGO団体であるセイブ・ザ・チルドレンの活動に刺激を受けて、イギリスにおいても大変多くの子どもたちが貧しい状況におかれていることに対して、政府にもっと援助をしてもらうように要望する手紙を出しました。生徒たちは、まずセイブ・ザ・チルドレンのウェブ・サイトで、イギリスにおいて恵まれない環境にある子どもたちにどのような援助が必要であるのかを調べました。そして、教師の手助けを受けながら地元選出の国会議員へ恵まれない子どもたちへの援助を充実するよう要望する手紙を書きました。生徒たちがもらった国会議員からの返事の手紙には、手紙を送ってもらったお礼と、国会でこの問題について取り組むことを約束すると書いてありました。

生徒たちはまた、トニー・ブレア首相（当時）にも手紙を書き、

途上国の子どもたちのHIV・エイズ対策に取り組むことを依頼しました。何度かの手紙のやり取りの中で、トニー・ブレア首相からの直々の返事の手紙をもらいましたが、そこには先進国首脳会議（G8）において、この問題の協力について他国にも呼びかけると書いてありました。

政治問題は自分たちとかけ離れたものではなく、自分たちの行動が何らかのつながりを持つことが実感できた瞬間といえるでしょう。

十二月には「野宿二〇〇六」という活動を行ったグループがありました。地元の慈善団体アバーディーン・キュレニアンが、アバーディーン展示会議センターにおいて、野宿をしながら募金活動を行う、という行事に生徒たちは参加しました。アバーディーン・キュレニアンは、ホームレスの人たちに援助活動をしている団体です。

生徒たちは、まず、参加の許可を教師からとり、その後校内にポスターを貼って参加者をつのりました。結果として二五名の生徒が参加することになりました。参加

するといっても、実行に移すのは簡単ではなく、付き添いの先生を探すことや、行き帰りの送迎バスの手配など、様々な手助けが必要であることがわかりました。

当日は、夜九時一五分にセンターに集まり、用意してきたダンボールで寝る場所を作りました。ほとんどの生徒は、朝まで寝られなかったようです。夜中にはピザの差し入れがあったそうです。そして、朝七時に終了したときは、全員に作りたてのベーコン・ロールが配られました。

この体験を通して、ホームレスの人たちは一年中、どんな天候でも、こうして過ごさなければならぬこと、しかも誰もピザやベーコン・ロールを届けてくれるわけではないというのはどんな気持ちだろうと考えたそうです。そして、アバーディーン・キュレニアンの



生徒たちがダンボールで作った
シェルター
(同校のホームページから)

方たちが、ホームレスの人たちに對して行っている活動がいかに重要であるかよくわかったそうです。

この野宿による募金では、全部で約千ポンドの募金を集めることができました。このように、募金活動においても、それが何のために行われているのかを、身を持って体験し実感することが重視されています。

その他にも、地域の高齢者の方に、慈善団体からクリスマスの届け物をするを手伝ったり、シエラレオネ共和国で戦災孤児院を運営している人と実際の孤児たちを訪問者として受け入れる活動などをしています。

このように、自分たちの身のまわりや世界で起こっていることに関心を向け、そのために自分に何ができるかを考え、そして行動計画をたてて実行し、その評価をするということがまさにシティズンシップ教育の真髄でしょう。その際、慈善団体など地域との連携協力が極めて有効に働いていることも特筆しておくべきでしょう。



自由で公正な 選挙の条件を考える

西武文理大学教授
新井 浅浩

●プロフィール あらい あさひろ

昭和35年生まれ。横浜国立大学教育学部卒、カリフォルニア大学教育学大学院修士課程卒。現在は西武文理大学サービス経営学部教授。専門は比較教育学、人格・情意教育論。

今回は、中等学校（わが国でいう中学・高校）のシティズンシップの授業で、選挙や投票について、どのように教えられているのかを紹介しましょう。

イギリスにおいても政治への無関心とその結果としての選挙の投票率の低下は深刻な問題と認識されています。なかでも若者の投票率の低さは、他の世代に比べて突出していることが指摘されています。このような事態はシティズンシップ教育が中等学校で必修化されたことの一つの要因となっているのです。

シティズンシップ教育では、選挙や投票に関する学習においても、その仕組みや事実関係を学ぶことよりも、探求すること、もしくは体験することを重視しています。

エヴァンズ社のわが国でいう中学二年から高校一年を対象とした教科書を見ると、「政党と選挙」という単元で選挙や投票について扱っています。

まずは、現在でも多くの国で、選挙で選ばれていない政府が権力をもっていることを学びます。そ



エヴァンズ社の教科書

して「軍事独裁」「全体主義国家」「絶対君主制」「神権政治」「無政府状態」という言葉について、それらの用語の意味をまずは自分で考えてシートに書いた後に、辞書で調べてから改めて自分の言葉を使って記入します。続いて、過去または現在において、それらの用語にあてはまる国家の例をそれぞれ記入します。そしてそれらの結果をクラスで話し合います。

次に「もし選挙が自由で公正でなかったら、どうなるか」について考えるシートに取り組みます。最初に、「自由で公正な選挙」が民主主義の根幹であることが確認されます。それが、人々が本当に望む人や政府を選ぶことを保障することであることを学び、もし自分の意見を表明し政府を選ぶ機会が与えられない状態になったら、自分はどうするかを考えさせます。生徒は、「そのような政府を打倒するためには、暴力を使った

り戦争を起こしたりする権利があると考えますか？」や「レジスタンス運動とテロリズムはどう違いますか？」という難しい問題の答えを考え、シートに記述します。そして議論をします。その際に普遍的なモラルを堅守することを念頭に置きつつも、これらは白黒をはっきりつけることが難しいものである点に注意します。

続いて、クラスで「自由で公正な選挙の条件」を考えるシートに取り組みます。多くの国が民主主義の国にするためにこれまで奮闘してきたし、今も多くはその途上にあることを確認します。イギリスでは、一九二八年以降、完全な民主主義になったと考える人も沢山いる一方で、イギリスの選挙制度はまだ十分な民主主義になっていないとは言えないという人もいます。ことが説明されます。そして、次に示す各項目が〈基本的なもの〉〈望ましいもの〉〈必ずしも必要ないもの〉のどれに当てはまるのかを考えて分類します。

「政党や候補が一つ（一人）以上あること」「政党や候補が四つ（四人）以上あること」「秘密選挙で

あること（人がどのように投票したかわからないこと）」「男女とも選挙権があること」「居住者のみに選挙権があること」「子どもに選挙権があること」「すべての市民に投票の義務があると法律で定められていること」「選挙が定期的（例えば四年に一度）に行われること」「候補者は選挙活動を公開で行え、自分の見解を自由に表明できなければならないこと」「候補者や政党は自分たちのマニフェストを公開し、もし選出されたら何をしたいかを皆に伝えること」「候補者はテレビのコマーシャルなど選挙のキャンペーンに好きなだけお金を使えること」「候補者や政党がキャンペーンに使える金額には厳格な制限があること」などです。

その後、政党と選挙について学習をします。まず、政党の意義や機能と選挙における政党の働きについて勉強します。続いて、保守党、労働党、自由民主党という大きな政党や、緑の党、自然法党など、少数政党あるいは単一問題の政党、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドという地域独

自の政党があることを知ります。これらの政党が、地方や国そして国際的な問題についてどのような政策を掲げているかについて、それぞれの生徒がウェブサイトで調べます。

次に、あるテーマについて、それぞれが事前に十分調べた後に、クラスで公開討論と模擬選挙を行います。その際、「民主的な討議のための基本原則」をポスターにして教室に掲示し、一同で確認します。

なお、この教科書では模擬選挙の進め方について、独立系の慈善信託団体である市民性教育研究所が公表している実践例を参考にしよう推奨しています。それを見てみると、まずは、クラスを四つのグループにわけて、それぞれが政党を結成します。そして自分たちの政党が、重視するべき政策課題を決めます。それに基づいて、グループ内でマニフェスト作成、演説の草稿・ポスターの作成、報道担当、立候補者の役割を決めます。クラス全体で、選挙のキャンペーンを実施します。そして投票をしますが、その際、選挙の方法

民主的な討議のための基本原則

〈正直〉

意見を持ち見解を表明できることは人間の基本的権利です。

〈寛容〉

討議とは対話です。他者の見解は聴かなければならないし、きちんと取り上げられなければならない。

〈異質なものの尊重〉

グループの誰もが等しく価値があり、けなされるべきではありません。

〈思いやり〉

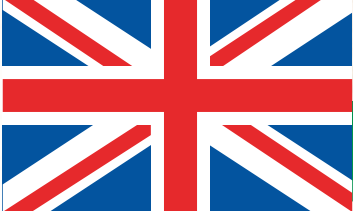
発言する前に考えましょう！あなたの意見がひとを傷つけるような表現の仕方になっていないか確認しましょう。自分の意見に根拠を持つようにしましょう。

についても生徒たちで話し合っ決めてます。例えば、比例代表制がよいのか、それとも比較多数得票主義（他候補と比較して得票数の多い者を順次当選者とする）がよいのか、また、選挙を監督するの

は誰がよいのか、生徒は、記名せずに投票できるべきか、開票のときに誰がその場にいてよいのか、投票の日に候補者や投票者が不在の場合はどうするべきか、などです。そして実際に投票し、集計を発表します。最後に選挙を実施して明らかになった問題点についてクラスで討議をします。

このように、ある見解について、その根拠を十分考えて、討論をし、そしてその結果、自分の見解にもとづいて投票行動に移すという体験をします。

もちろん、中等学校の一四歳から一六歳の段階で選挙や投票に関してこのような学習をしただけで、若者の投票行動が大きく変わると考えているわけではありません。これまでも紹介したように、自分の意見を考え、そして表明すること、自分やまわりの状況を変革するために何が必要かを考え実際に行動すること、民主的であるということがどういうことかを実際に体験することなど様々な形での学習が土台にあって、このような投票や選挙の学習が意味を持ってくるのです。



市民としての自覚と能力の向上が 選挙・投票の啓蒙につながる

西武文理大学教授
新井 浅浩

●プロフィール あらい あさひろ

昭和35年生まれ。横浜国立大学教育学部卒、カリフォルニア大学教育学大学院修士課程卒。現在は西武文理大学サービス経営学部教授。専門は比較教育学、人格・情意教育論。

イギリスのシティズンシップ教育に関する連載を終えるにあたって、イギリスのシティズンシップ教育のあり様とその課題をあらためて概観し、その上で、日本にどのような示唆を与えてくれるかを考えてみたいと思います。

そこでまず、イギリスでシティズンシップ教育の啓蒙普及活動を行っている市民性財団チームリーダーのテッド・ハドルストン氏へのインタビューの一部を紹介することとします。

市民性財団

テッド・ハドルストン氏大いに語る

シティズンシップ教育で、私たちがまず重要であると考えるのは、若者に自分たちが市民であるという感情・アイデンティティを持たせることです。これがすべての土台であって、そのため、私たちは何をすればよいのかを考えなければなりません。

その上で、若者たちが市民としての責務を果たすための準備が必要となります。それには四つのことがあります。

一つは、若者達が（市民としての行動をする）能力を獲得するには、良い情報を得ることです。それは、政治、法律、経済に関する知識ですが、私達の役割は、そうした良い情報に若者の関心を向けさせることです。

二つ目は、単に事実としての情報を得るだけではなく、それらを概念として理解することです。例えば、「民主主義とは」「直接民主主義とは」「間接民主主義とは」「国民投票とは」ということを知識として知るだけでなく、概念として理解することが必要です。

三つ目は、実際上必要となってくるコンピテンシー（能力・資質）を身につけることです。思考のスキル、討議するスキル、デイベートのスキル、交渉のスキル、調査分析のスキル、プレゼンテーションのスキルなどが考えられるでしょう。これらすべてが市民としての生活において必要なものです。四つ目は、（市民としての）特定の価値や態度を身につけると、すなわち民主主義社会における徳目を身につけることです。例えば、遵奉、寛容、交渉による解

決、暴力的でなく平和的解決などを大切にする価値観や態度を身につけなければならぬのです。

イギリス（イングランド）においては二〇〇二年からシティズンシップ教育が必修化されましたが、その際、いくつかの（困難な）挑戦がありました。

一つは、シティズンシップ教育の導入以前には、公民科や法学習、政治学習といったものを教科として実施していた伝統がなかったことです。義務教育の中で、そういう教育の経験を持っていなかったところにシティズンシップ教育が導入されたのです。

もう一つは、イギリスの場合、人々の間にそもそも市民という意識がなかったことです。一九九〇年代でさえ、市民よりも（女王の）臣民という意識があったのです。イギリスでは市民というと、フランス革命を想起します。つまり市民ということを考える文化がなかったのです。

三つ目は、中等学校での授業時間割に余裕がなかったことです。そこにシティズンシップ教育が入ってきて、授業時間の中のどこで



テッド・ハドルストン氏
(ロンドンの市民性財団本部にて)

やってもいいといわれたのですが、それがかえって事態を難しくしました。加えて、当初はシティズンシップの専門家というものが育成されていませんでした(筆者注…今も十分ではありません)。そのため、他の教科を教えるときには挑戦的な取り組みをする教師たちも、シティズンシップに関してはそうではなく、知識の注入にかたよった退屈な授業になってしまいう傾向がありました。

最後に、シティズンシップ教育を推進する上で、私がつとも困難な問題であると考えていることを話したいと思います。それは、政治的リテラシー(能力)に関してなのですが、若者の政治的判断力を発達させることは実はかなり難しいということです。というのは、実際の政治というものは極めて複雑であり、そして厄介でもあ

る、人間的な活動なのです。例えば、政治家は本当のことを言いません。その代わりに情報を意図的にリークして世論を操作したりもします。

したがって、現実の生活における政治をどう理解させるのが重要になるのです。これは教科書からの情報だけで育つものではないのです。(二〇〇七年三月筆者によるインタビュー…於ロンドン)

日本における

シティズンシップ教育の今後

さて日本におけるシティズンシップ教育の今後を、前記のハドルストン氏の説明に即して考えてみましょう。日本においても、公民科という教科の伝統があります。これがシティズンシップ教育はどのようなものでしょうか。

日本のこれまでの公民科は、ハドルストン氏のいう情報提供の部分が大きいように思えます。これはこれで大切なことですが、それだけでは、ハドルストン氏のいう情報の概念的理解に到達していないのではないのでしょうか。

すなわち「民主的とは」「他者への寛容とは」、などといったことに關して、知識を得る以上のものにならないのではないかと思われまふ。シティズンシップ教育が知識の注入中心になってしまう危険性については、イギリスでも問題とされていますが、日本においても今後重要な課題となるでしょう。

情報の概念的理解とは、「民主主義とは」「平等とは」「自由とは」といった問いに対して、それを実感として捉え理解することです。これはテキストからの理解ではなかなか得られないのです。

そのためにイギリスでは、この連載で紹介してきたように、さまざまな活動を通して、実感を伴って理解していくことを目指しているのです。そうなるに授業のあり方は、大きく変わってこなければなりません。あるいは学校のあり方といつてよいかもしれません。

このことは、ハドルストン氏がその次に指摘しているシティズンシップに必要なコンピテンシーやスキルの育成という問題ともつながってくるでしょう。討議する力、説得する力などをつけないと、知

識だけを身につけても実際の役に立たないのです。そのためにも授業の方法は、一方的に講義をするものから、そういう力を身につけるようなものに脱皮しなければなりません。

次に、シティズンシップ教育では、民主主義の社会に望ましいとされる価値や態度の育成を目指しています。何事にも相対主義的な態度をとりがちな現代社会にあって、このことの自覚は重要です。

選挙・投票を啓蒙する教育とは

最後に、シティズンシップ教育が、選挙や投票行動にどのように貢献できるのかを考えなければなりません。この連載でも紹介してきたように、重要なことは、選挙制度の理解や投票行動の促進だけではなく、市民としての自覚をはじめとして、話し合い・代表のあり方・社会のための貢献などを総合的に扱うことであり、また特定の教科のみで教育するのではなく、学校の活動全体の中で推進していくことが、結果的に最短の道となることを知るべきでしょう。